



「非認知能力」

校長 那賀 典仁

1年の最終月、12月に入りました。寒さもいつもらしくなってきた、暖房器具が必要になってきました。今年もそろそろ終わりが見え始めました。耳を澄ますと、どこかの教室よりベートーヴェンの「歓喜の歌」を鍵盤ハーモニカで演奏している音が聞こえてきます。正月を考えて作曲されたわけではないのですが、最近では正月の定番の曲の一つになってきているのではないかと思います。曲の持つイメージがマッチしているのでしょうか。



子どもたちも、かけ足運動で寒い外を駆け回り、2学期のまとめとして大きな行事「上っ子まつり」を成功させました。幼稚園の先生や学校協議会の方々にお褒めの言葉をいただきました。あとは学習のまとめをしていきますが、これはあまり人気がないのではないかと思います。

年末にお話しすることではないのですが、私も気になったらそのことについて考えてしまうタイプなので今月のお話はこのようなタイトルとなっております。

「非認知能力」は、何も最近出てきた言葉ではありません。私も存在は知っていましたが、あまり難しい言葉には見て見ぬふりをするので、今までほっておいてしまいました。しかし、最近になって、この言葉を調べなければならない状況になり、ネットや本で見ると、教育にとっては大変大事なことだったため、知っておかなければならないなと感じました。私の付け焼刃の知識ですが、間違えがあった場合は教えてください。また、自分に間違いがあることが見つかった場合は次の号などでお伝えします。

単純に言えば「認知能力」の反対が「非認知能力」です。ただ、「認知」って何？となると思います。ここでの「認知」は、「わかる」「みえる」という意味が近いでしょうか。「認知能力」は「わかりやすい力」「みえやすい力」といえると思います。例えば、テストの点数は「みえやすい」ですよ。しかし、がんばったかどうかは、「わかりにくい」ですよ。このような「わかりにくい」「みえにくい」力のことを「非認知能力」というようです。こう説明すると、わかりやすいのではないかと

思います。

「非認知能力」は幼児期から身につけたり、育んだりすることができるそうです。だからと言って幼児期を逃した小学生につかないというわけではなく、もちろん私たち大人になっても身につく力だとされています。

いくつか挙げると、「あきらめない力」「集中する力」「協調する力」や「誰にも言われずにお手伝いや勉強をする力」などと確かに数値などで表れにくい力ですね。しかし、この「非認知能力」は、今、文部科学省が注目しており、子どもたちの評価にも使われる「学びに向かう力・人間性」の部分がこの「非認知時能力」だといわれています。そして、この能力は幼児期の「遊び」が大切な役割をしているといわれています。

実際に、この間ある幼稚園に視察に行かせてもらいました。その時に園児は制作活動としてビー玉を転がす基地のようなものをつくっていました。

先生はまずゴールの設定をします。「ビー玉を転がすところをつくる」です。園児は、材料を見に行き吟味します。ここですでに自分がつくりたいもののイメージと材料がマッチしているかをさわったりつけてみたりしながら、「素材理解」したり「試す」ことをしたりします。また材料とつけ方や転がし方、そしてうまくいくかどうかなどに対して、園児同士「対話」します。そして、「協働」します。これだけでも、園児は「遊び」をしています。教師側から見ると「学び」をしているのです。しかも考えてみてください。

今挙げさせてもらったいくつかの行為は大人になっても必要で重要なものではありませんか。子どもたちは「遊び」の中で、学んでいるのです。



現在の教育の中で、そのようなところに目を向け、小学校でももっと「遊び」の授業をすることが必要ではないかと思います。幼稚園などの就学前の関係機関では、活動のほとんどが「遊び」だと園長先生がおっしゃっていました。幼児期の子どもは小学校に入ったら自分の机、いすで座って学習します。しかし、子どもの中にはいきなりすぎてその変化についていけないことがあるのも事実です。そこで「遊び」を取り入れた学習をすることが、子どもたちが興味や関心をもって没頭するくらい集中して、対話をしながらああでもないこうでもないで試行錯誤して、良いことを「いいね」と認め合って、できたときに達成感があって、自己肯定感が高まる。そういった授業の展開を私たち教師はめざすことが大切だと思います。その中で私たち教師も子どもの姿を見て達成感等味わえたら、まさにWINWINの関係になれるのではないかと考えています。このことはお家でも十分できることだと思いますので、まずは考えて試しにやってみることが、子どもの非認知能力がつく第1歩になるのではないのでしょうか。